

ロッシーニ《六つの四重奏ソナタ》に関する覚書 水谷 彰良

手写譜完本の再発見に言及した筆者の作品解説は、アンサンブル・エクスペラシオンのCD「ロッシーニ 弦楽ソナタ集」(キングインターナショナル、2003年発売。詳細は本稿末尾参照)のライナーノーツに遡りますが、速度記号の異同を明らかにした本稿の初出は、『ロッシニアーナ』(日本ロッシーニ協会紀要)第27号(2005年発行)所収の拙稿「ロッシーニ《六つの四重奏ソナタ》に関する覚書」。その改訂版をHPに掲載します。(2011年4月改訂)

ロッシーニは本当に早熟の天才だったのか？

ロッシーニは早熟のオペラ作曲家——あらためていうまでもない話であろう。《セビリヤの理髪師》は24歳の誕生日を目前に初演、オペラ・セーリアとオペラ・ブッフア両ジャンルの最初の傑作《タンクレーディ》と《アルジェのイタリア女》はその3年前、秀作として知られる5作のファルサに至っては18歳から20歳にかけての作品なのだ。早熟の天才といわれるモーツァルトは11歳で最初のオペラ《アポロとヒアチントゥス》を作曲したけれど、25歳以前に作曲したオペラは《偽の女庭師》までの合計8作しかない。ロッシーニは《ラ・チェネレントラ》まで20作だから、単に数ではなく質の面でも飛びぬけた早熟にして天才というほかない。ついでにいえば、早熟といえないサリエリですら25歳までに10作のオペラを発表し、才能を認められている。オペラにかぎっていえば、モーツァルトは早咲きではあっても「早熟の天才」の名に値しないのである。

だが、並外れた天才にも少年時代があり、習作期がある。そして私たちは通例、円熟期の傑作を知った上で、その作曲家の成り立ちや習作に目を向けるものだ。ロッシーニの場合、オペラ作曲家となる前の作品は極端に少なく、16歳の誕生日(1808年2月29日)までの作曲で真作とされるのは、全6曲からなる《四重奏ソナタ(Sonata a quattro)》がすべてである¹。モーツァルトとのなんとという違いだろう！モーツァルトは同じ年齢ですでに20を越える交響曲を書いているのだ！ロッシーニを早熟の天才と呼べるのはあくまでオペラ作曲家としてであり、作品の質と量を鑑みれば「少年時代のロッシーニは天才とは見なしがたい」といった方が正しい。

それでもロッシーニの《四重奏ソナタ》を知らぬ音楽愛好家は一人もいない。誰もが、どこかで、一度は耳にしているはずだから。そしてこの作品は、作曲者が誰かなんてお構いなしに聴き手を魅了する。なんと晴朗で清々しい音楽だろう。澄み切った調べが一陣の清風となって私たちの心を横切る——瑞々しい、心地よい感触を残して。200年ほど前に、僅か12歳の少年が遊び半分にこれを作曲したと知っても知らなくても、印象は変わらない。それにロッシーニは、その後一度も弦楽四重奏曲や弦楽アンサンブルを書いていないから、円熟期の作と比較のしようがないのだ。それゆえ《四重奏ソナタ》は、このジャンルにおけるロッシーニの最初で最後の名作となる。

作品の成立と流布

モーツァルトの死から2ヶ月半後の1792年2月29日、ロッシーニはアドリア海に面したイタリアのペーザロに生まれた。父ジュゼッペはこの町に雇われたトランペット奏者。美しい声に恵まれた母アンナは夫に声楽を学び、後にオペラ歌手として活動する。そうした家庭環境ゆえ、ロッシーニも幼い頃から音楽に親しみ、6歳のときにペーザロ市の楽団でリスターロ(トライアングル奏者と推測)を務め、報酬を得ている。正規の音楽教育は革命かぶれの父の投獄を経てボローニャに移住した1799年に始まり、2年後には9歳にしてファーノ劇場の管弦楽団でヴィオラを弾き、12歳の1804年には優れたボーイソプラノとして母と一緒にイモラの劇場で歌い、絶賛された。

12歳のロッシーニはその年の夏を、友人でパトロンでもあるアマチュア・コントラバス奏者アゴスティーノ・トリオッシ(Agostino Triossi, 1781-1822)のラヴェンナ近郊の別荘で過ごした。友人たちとの日々で書かれたのが、全6曲からなる《四重奏ソナタ》である。仲間との気晴らしに数日間で作曲した——後年ロッシーニは3日間で作曲・写譜されたと述べる——文字どおりの余興音楽であるが、そこにはロッシーニの才能の萌芽がしっかりと刻印されている。初版楽譜は第3番を除く5曲が《二つのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための五つのオリジナル四重奏曲》と題して1828年または1825~26年²にリコルディ社から刊行され(但し、編成はオリジナルと異なる)、続いて第三者のフルート四重奏編曲やフリードリヒ・ベアー(Friedrich Beer, 1794-1838)編曲のフルート、クラリネット、ホルン、ファゴット四重奏ヴァージョンで広く流布したが、全6曲が「二つのヴァイオリン、チェロ、コントラバス」のオリジナル編成で世に出たのは1954年が最初であった。自筆楽譜を喪失し、6曲セットの手写譜完本も20世紀のある段階まで存在を知られていなかったのである。

手写譜完本の発見

ロッシーニの《四重奏ソナタ》の編成がヴィオラではなくコントラバスを含み、全6曲あると確認されたのは、1930年代後半にワシントンの議会図書館（Library of Congress）で手写譜の完本が発見されたことによる。現代の文献は発見者を作曲家アルフレード・カゼッラ（Alfredo Casella, 1883-1947）とするが、正しくは、クレメンティのシンフォニア研究で同図書館を訪れたカゼッラに司書の一人が手写譜の写真複製をプレゼントしたのが発端である。

この手写譜は四つの楽器のパート譜を合冊したもので、タイトル頁に第三者の筆跡で「12歳のジョヴァッキーノ・ロッシーニ氏が1804年にラヴェンナで作曲した六つのソナタ作品（Opera di sei sonate Composta Dal Sig. r Gioacchino Rossini in età di anni XII in Ravenna, l'Anno 1804）」と書かれていた。第一ヴァイオリン（ヴィオリーノ I）のパート譜の余白には、ロッシーニ未亡人オランプの筆跡でマッツォーニなる人物への寄贈文が、こう記されている——「私の素晴らしい友へ、友情の記念として贈る。ロッシーニ未亡人 O [オランプの頭文字] 1873年3月22日、マッツォーニ氏へ（Offert à mon excellent ami, en souvenir d'amitié O.V.ve Rossini ce 22 Mars 1873 à Monsieur Mazzoni）」。

カゼッラが驚愕し、これを真正な楽譜と確信したのは、続く頁にロッシーニの自筆で次のコメントが記されていたからである（右図参照）。

第一ヴィオリーノ [ヴァイオリン]、第二ヴィオリーノ、ヴィオロンチェッロ、コントラバス [コントラバス] のパート譜。この六つのひどいソナタは、私がまだ通奏低音のレッスンすら受けていない少年時代に、パトロンでもあった友人アゴスティーノ・トリオッシの [ラヴェンナ近郊] 別荘で作曲したものである。すべては3日間で作曲・写譜され、コントラバスのトリオッシ、[彼の従兄弟で] 第一ヴァイオリンのモリーニ、その弟のチェロ、そして私自身の第二ヴァイオリンによって実にへたくそに演奏されたが、実を言えばその中で私が一番まともであった。 G.ロッシーニ

写真複製をイタリアへ持ち帰ったカゼッラは、その概要をボローニャ・マルティーニ音楽院のロッシーニ生誕150年記念文集『ロッシニアーナ (Rossiniana)』(1942年)³で紹介するとともに、新発見となる第3番の初版楽譜を1951年にカリッシュ社から出版した。全6曲の完全版は1954年にロッシーニ財団が刊行した『ロッシーニ音楽帖 (Quaderni Rossiniani)』第1巻が最初である。

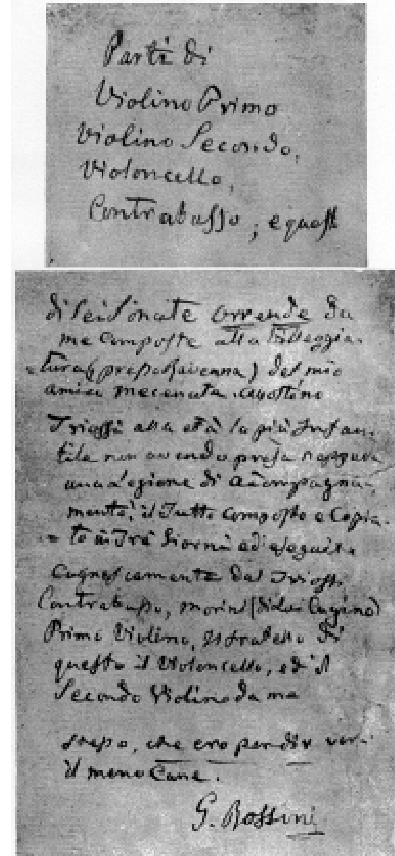
作品について

全6曲のソナタはそれぞれ急〜穏〜急の3楽章で構成され、四つの楽器を対等に扱って各楽器の特性を活かすとともに、トリオッシへの配慮からコントラバスに独自の役割を与えた点に特色がある。その音楽にウィーン前期古典派の影響を指摘する者もいるが、純粋なソナタ形式を採らずに単一主題とその自由な発展に委ねる点で、サンマルティーニやボッケリーニといったイタリア室内楽の系譜に連なるものといえよう。旋律の瑞々しさ、名技性への憧れ、機知と抒情性に、若きロッシーニの才気と個性の片鱗が聴き取れる。

興味深いのは第6番第3楽章の自然描写。これは夏のイタリアで頻繁に遭遇する短時間の嵐（テンポラーレ）を音楽化したもので、小雨が降り出したかと思うと、すぐに雷鳴轟くどしゃ降りになる様子が鮮やかに描かれる。後に《試金石》や《セビリヤの理髪師》で有名になる「嵐の音楽」の原点がここにある。次に全6曲の基本情報を記しておこう。

題名 六つの四重奏ソナタ (Sei sonate a quattro)

註：自筆楽譜消失により正式な作品名称は不明。ここでは総題をゴセット目録に準拠し、日本語は内容に即して《六つの四重奏ソナタ》とした（通例《六つの弦楽ソナタ》とされる）。なお、前記の手写譜完本には第三者の筆跡で「六つのソナタ作品 (Opera di sei sonate)」とあり、ロッシーニ自身は冗談めかして「六つのひどいソナタ Sei Sonate orrende」と記しているが、どちらも正式名称とは見なせない。



手稿譜におけるロッシーニ自筆の添え書き

作曲 1804年夏。ラヴェンナ近郊の友人トリオッシの別荘（ロッシーニ証言を根拠とする）

編成 ヴァイオリン I・II、チェロ、コントラバス

第1番（ト長調）、第2番（イ長調）、第3番（ハ長調）、第4番（変ロ長調）、第5番（変ホ長調）、第6番（ニ長調）の全6曲からなる。

自筆楽譜 未発見（ロッシーニ自筆の注釈付き手写譜はワシントンの議会図書館 Washington, Library of Congress 所蔵）

初版 Carisch, Milano, 1951.（第3番のみ。前記手写譜に基づく初版）

Quaderni Rossiniani I., Fondazione Rossini, Pesaro, 1954.（第1,2,4,5,6番）

編曲版 全6曲のうち第3番を除く5曲は、オリジナル以外の様々な楽器編成により19世紀に出版。その初版は1828年もしくは1825-26年のリコルディ版（出版番号2665-66, 2668-70）で、『二つのヴァイオリン、ヴィオラとチェロのための五つのオリジナル四重奏曲（*Cinque Quartetti Originali per due violini, Viola e violoncello*）』と題されている。その後、編曲者不詳の『フルート四重奏曲』または『木管四重奏曲』（編成はフルート、クラリネット、ホルン、ファゴットが一般的だが、他の編成もある）、さらに『五重奏曲』（弦楽五重奏が一般的）などのエディションが Schott, Ricordi, Breitkopf & Härtel その他の出版社から出版。

全集版 未成立（2012年4月現在）

速度記号の異同について

あまり知られていないことだが、全集版未成立のこの作品にはエディションとディスクに速度記号の異同が少なからず存在する。そもそもロッシーニ財団版（1954年）に信じがたい矛盾があるのだ。第3番の第2楽章は目次でアンダンティーノとされながら楽譜上はアンダンテ、第3楽章は目次でアレグロとされながら楽譜上はモデラートなのである。他にも異同があり、初期のロッシーニ財団の杜撰な仕事ぶりが見て取れる。

では、どちらの速度表記が正しいのか。その答えは、ワシントンの議会図書館所蔵譜に準拠したドブリンガー版⁴と、ロッシーニ財団版のそれを比較すればおのずと明らかになる。前記のようにロッシーニ財団版の目次と楽譜表記には不一致があるので、ここでは3種の比較が必要になる（次表参照）。

第3番のエディションにおける速度記号の比較

	ロッシーニ財団版（1954年）		ドブリンガー版（ワシントンの議会図書館所蔵譜に準拠とされる）
	目次の速度表記	楽譜中の速度表記	
第1楽章	Allegro	Allegro	Allegro
第2楽章	Andantino	Andante	Andante
第3楽章	Allegro	Moderato	Moderato

御覧のように第2楽章と第3楽章では目次の表記のみが異なり、それが間違いであると判る。ところが現行ディスクの中には誤った目次の速度表記を採用したものがあり、解説書も同様である。そしてこれは実に不思議なことなのだが、1992年ロッシーニ・オペラ・フェスティバル（以下、ROFと略記）のプログラムでは第2楽章がモデラート、第3楽章がアレグロと、別種の速度記号が書かれているのである（前記プログラム p.10）。これは単純ミスか、それとも私の知らぬ根拠による訂正なのか、現時点では答えることができない。個人的には単なるミスかなとも思ったが、こんなうっかりミスを ROF プログラムがするものだろうか……作曲者生誕200周年、しかもこれが ROF における最初の演奏なのである。これに関する謎は全集版が成立しないと解決をみないものの、問題点そのものは整理しておきたい。

そもそもワシントンの議会図書館で発見された全6曲の楽譜は第三者による写譜であり、ロッシーニはこれがかつて自分の作曲した音楽である、と認めたにすぎない（困ったことに、これをロッシーニ自筆のパート譜とする解説書もあるが、間違い）。そしてこの筆写パート譜が、失われたロッシーニのオリジナルと細部にわたって一致するとは考え難く、この手写譜が最も古い時代のものかどうかとも明確でない。加えてリコルディ社による初版楽譜（コントラバスをチェロとした編成）の問題もある。1828年（または1825-26年）に出版されたそれは第3番を欠く全5曲であるが、プレート番号は2665, 2666, 2668, 2669, 2670, 2671のみで、2667が落ちているのだ（リコルディ社の出版目録1857年版による）。

なぜリコルディ社は第3番に該当する出版番号を飛ばし、5曲だけを出版したのだろうか。勝手な推測をすれば、リコルディ社は全6曲の原本を入手しながら（もしくはこの作品が全6曲からなることを知りながら）、第3番の原本を一時的に紛失し、後日それが出てきた際に追加できるよう第3番に該当する出版番号を留保したのではなからう

か。けれども第3番の楽譜は、20世紀にワシントンの議会図書館で手写譜が再発見されるまで存在を知られていなかった。当然のことながら、全6曲完本の手写譜はリコルディ社が最初に入手した原本とは出所が異なるはずである。そして19世紀に出版された種々の編曲譜がすべて全5曲であることから、それらはリコルディ版から派生したものと推測しうる。

それゆえ現時点でこの作品の批判校訂版を作ろうと思えば、ワシントンの議会図書館所蔵の手写譜、リコルディ社の初版楽譜（第3番除く）、その他の写譜と編曲譜（但し第3番を欠く）など、あくまで二次的な素材のみが基礎資料となり、全集版の第一次校訂譜すら成立していない事実は、こうした現存資料の乏しさがネックになっているものと思われる（1992年ROFプログラムには使用エディションも校訂者名も記されず、第一次校訂譜でないのは明白）。したがって、現時点で正確な情報を提示するのは不可能であるが、次にワシントンの議会図書館の手写譜に基づくドブリンガー版に準拠した構成を掲げ、ロッシェニ財団版（楽譜上の表記のみ抽出。略号FRP）ならびに1992年ROFプログラム（略号ROF）との表記上の異同を注記しておきたい。

第1番（ト長調）

- 1) モデラート 4/4 拍子 ト長調
- 2) アンダンテ* 3/4 拍子 変ホ長調
*アンダンティーノ [FRP] [ROF]
- 3) アレグロ 6/8 拍子 ト長調

第2番（イ長調）

- 1) アレグロ 4/4 拍子 イ長調
- 2) アンダンテ* 4/4 拍子 ニ短調
*アンダンティーノ [FRP] [ROF]
- 3) アレグロ 2/4 拍子 イ長調

第3番（ハ長調）

- 1) アレグロ 4/4 拍子 ハ長調
- 2) アンダンテ* 4/4 拍子 ハ短調
*モデラート [ROF]
- 3) モデラート* 2/4 拍子 ハ長調
*アレグロ [ROF]

第4番（変ロ長調）

- 1) アレグロ・ヴィヴァーチェ* 4/4 拍子 変ロ長調
*アレグロ（ヴィヴァーチェ）[ROF]
- 2) アンダンテ* 4/4 拍子 ト短調
*アンダンティーノ [FR] [ROF]
- 3) アレグレット 2/4 拍子 変ロ長調

第5番（変ホ長調）

- 1) アレグロ・ヴィヴァーチェ* 4/4 拍子 変ホ長調
*アレグロ（ヴィヴァーチェ）[ROF]
- 2) アンダンテ* 3/4 拍子 変ロ長調
*アンダンティーノ [FRP] [ROF]
- 3) アレグレット 2/4 拍子 変ホ長調

第6番（ニ長調）

- 1) アレグロ・スピリトーズ* 4/4 拍子 ニ長調
*アレグロ（スピリトーズ）[ROF]
- 2) アンダンテ・アッサイ* 3/4 拍子 ヘ長調
*アンダンテ（アッサイ）[ROF]
- 3) アレグロ [テンペスタ] * 4/4 拍子 ニ長調
*アレグロ（テンペスタ）[ROF]

推薦ディスク

- ・アッカルド、ガザー、ムニエ、ペトラッキ（Philips PHCP 20357/8 [3608/9] 註：モダン楽器による名演・名盤。
- ・アンサンブル・エクスポラシオン（Harmonia Mundi HMC 901776 / HMC901847 [国内盤はキングインターナショナル KKCC-481 及び KKCC-514]

註：ピリオド楽器による演奏。国内盤解説は筆者執筆。



¹ 従来の文献がロッシェニ最初の作品としたカンツォネッタ《もしも粉挽き娘を望むなら（*Se il vuol la molinara*）》は、現在では1801年の作曲ではなく後年[おそらく1808年以降]の作品とされる。

² ゴセット目録（Grove,2001）は1825-26年だが、リコルディ社出版目録（1857年）では1828年1月とされる。

³ Alfredo Casella: *Una ignota "Sonata" per archi di Gioacchino Rossini*, Roma maggio 1942-XX. [in "*ROSSINIANA*" A cura del R. Conservatorio "G.B.Martini" di Bologna., 1942]. 本稿に記した手写譜完本発見の経緯とその概要は、このカゼッラ論文に基づく。

⁴ Rudolf Malarić 編, Ludwig Doblinger, Wien-München, DM251-256. (1974 パート譜 / 1977 総譜。総譜、パート譜ともに出版番号 D.12 590)